

保育園児による地域の民話の伝承

——地域の保育園としての文化伝承の可能性とその意義を探る——

Handing down of Folk Tales of the Area by Nursery School Students

——Searching for the Possibility and the Significance of Culture Tradition by a Nursery School of the Area——

井 本 トシミ

Toshimi IMOTO

(ひかり保育園)

嶋 田 由 美

Yumi SHIMADA

(和歌山大学教育学部)

2008年10月1日受理

1. はじめに

筆者たちの園ではこれまで、保育実践の一つとして、日本の昔話の伝承に取り組んできた。昔話には、人々の自然観や、子ども観、人生観等がしみ込み、人が生きるにあたっての様々な知恵が幾世代にもわたって語りつがれていると言われているが、このような昔話がすたれていく状況を惜しみ、保育者が昔話を語ることを中心として、意識的に昔話を取り入れる試みを行ってきた。このような活動の結果、園児には、昔話の口伝えによる簡潔で、わかりやすく、かつ美しい語りを聴く力や、自由に空想し、さまざまなことを感じとる力が育成されてきたように感じる。また、それに伴い保育者、保護者、それぞれの昔話への意識や取り組みの姿勢にも変化が見られた。

そこで次に、地域との関わりが重要視される保育園として、地域に伝わる民話に着目し、これまでの昔話の語りの活動を発展させ、民話の活動を試みることにした。民話とはここでは地域に深く入り込み、民衆の間に言葉で語り継がれて、地域の歴史や風習を伝える話の一つであると捉える。地域の園としてこれらの伝承の必要性を考え、園児の語りによる文化伝承の可能性とその意義を探ることが、本活動を考察する目的である。

2. 民話に対する園児の受け止め方

対 象 児：3歳児27名 4歳児23名 5歳児36名

実践期間：2007年7月～2008年3月

参 考 本：『民話・伝説集 やっつけられたたかたか坊主 ～藤井寺のむかしばなし～』

(中野千代著 <自費出版>)

園が位置する大阪府藤井寺市は古墳や神社仏閣が数多くある地域で、近隣の市にまたがる古墳群は、特異な文化資産であり、普遍的価値をもつとして世界文化遺産登録に向けた取り組みも行われている。中野千代著『民話・伝説集 やっつけられたたかたか坊主』(写真1、2)には園付近の話が多く収められており、この地域に居住する園児には身近に感じられるかと思い、

対象児にこの本所載の民話を伝えていくことにした。



写真1)『やつつけられたたかたか坊主』表紙

道明寺ほしい	74
はにわのできたわけ	68
北向きじぞう	62
小山の勘助うちわ	56
じゆずの木不思議	46
大蛇と木こり	36
孝行むすめ「衣縫孝女」	28
あかむくの樹	22
うっかり雷	16
やつつけられたたかたか坊主	6

写真2)『やつつけられたたかたか坊主』目次(一部)

『民話・伝説集』には地域色の濃い伝説や世間話のようなものが多く、これまで園児が慣れ親しんできた昔話とはかなり違い、当初、話を聞く園児には理解しがたい表情が見受けられた。地域の話にはその土地の

具体的な地名や人名、それらにまつわる事物が詳述されており、耳で理解できる限度を超えてしまっていたためと思われる。また、昔話のように伝聞の形をとりながら二度三度の繰り返して展開していくといった定まった語りの形がないことも複雑に感じさせ、話の整理をつけにくくさせている一つの要因であると思われる。そこで、話を簡略化し、難しい地名や時代背景などを省いたものに作りかえてみたが、園児には、聞いてはいるものの、話の内容が心に届いている様子は見られなかった。

3. 地域の民話の園児への伝わり

9月に入り5歳児に、語りのスタイルを離れ、説明を加えながら筋道の確認を取って話すことを試みた。そして内容に関する問答遊びをしてみたところ、園児は大変興味を示して喜び、普段聞きなれない、言いにくい地名や人名ほど口にしたくなり、互いに声に出し合って楽しむといった言葉遊びのような感覚で民話の内容を捉えはじめた。それと同時に民話そのものも語りで聞けるようになっていった。まだ地域の民話をどことなく掴みきれずにいた若い保育者たちからは、「園児への関わりを通して民話が自分自身の中にもすっきりと入るようになった」という声が聞かれ、他の3歳・

4歳児でも同様の成果が現れた。

そこで民話を使った保育実践の第一歩として各年齢ごとに一話ずつ自分たちの民話を選び、覚えることにした。園児が好んでいるものの中から年齢を考慮し、5歳児は道明寺天満宮の祭神・菅原道真にまつわる「じゅずの木不思議」、4歳児は仁徳天皇の第4子にあたる允恭天皇陵にまつわる「大蛇と木こり」、3歳児は神社の境内に落ちた雷を宮司が石で閉じ込めたという「うっかり雷」の三話を選出した。初めに園児が民話に対してどのようなイメージを持っているのか、5歳児それぞれの絵画表現から探ってみた。

まだこの段階では、普段よく描いている花や草、雲、太陽を背景に描く園児が多い中、写真3)のように、寺や井戸、つるべなどを描いた園児も見られ、民話に出てくる特徴的な事物が少しずつ園児の中に印象づけられている様子が伺われる。

写真4)の絵には菅原道真(左)が女兒として描かれている。耳で聞く語りの場合、同じ登場物であっても園児はそれぞれに違うイメージで受け取っていることが多い。例えば「水を入れた壺」であれば壺はバケツであったり、茶碗やペットボトルが描かれていたりする。菅原道真という名は園児にはなじみのない名前であり、話の中に男女を示す言葉がないため、このよう



写真3) 園児が描いた絵①



写真4) 園児が描いた絵②



写真5) 園児が描いた絵③



写真6) 允恭天皇陵

に女兒をイメージしていた園児もいる。

大半の園児が、写真5)に代表されるように、黄色い花と柿色の実がついた木の横に登場人物を並べたものを描き、お話で聞いた「じゅずの木」がすでに共通のイメージとなっていることが分かった。

地域の民話には木や石や蛇など、誰もがすぐに想像できる、身近で何かしらの「いわれ」がついているものが多く、これらが民話へ園児を誘ってくれるものだと思う。

次に、実際に民話の場所をそれぞれ訪れ、園の取り組みを説明し、宮司らに園児への話を依頼した。

天満宮祭神の閉ざされた扉の前で、宮司から、この中に菅原道真がまつられているという話を聞いた5歳児からは、自分たちが知っている民話の主人公とまさに今、居合わせているような空気が漂い、緊張と興奮に溢れた興味津々な様子が見てとれた。

「じゅずの木」が実際にある場所へ案内されると、園児は話に合わせて、108個のじゅずの実を拾おうとし、また、落ちていた実の色や花の有無など民話との違いを指摘する声も聞かれた。園内で保育士から話を聞いている段階で自分自身の内にこの木のイメージを鮮明に思い描いていたことが印象付けられた。

4歳児は允恭天皇陵¹⁾(写真6)を訪れたが、ここでは園児全員の視線は濠跡の向こうの木立にあり、民話に出てくる大蛇を追っていた。出かける前は大蛇が今もいるか否かで友達同士でもめていたが、現地を見た瞬間、一斉に民話を事実であると感じ、疑わない園児の姿があった。

3歳児は地域の氏神社を尋ねたが、宮司からの話を聞き、大きな太鼓を叩かせてもらった園児は、民話の中の雷にイメージを繋げていた。また、一番の関心事である巨石を見るなり、話を真似て石を持ち上げようとした。そして、「動けへんわ」「家と同じくらい重いんや」など、民話と重ね合わせて口々に思いを言い合う姿が見られた。

民話にゆかりの道明寺天満宮を訪問した後に、5歳児は訪れた感想を絵日記に記した。NT児は持ち帰ったじゅずの木の实を埋めれば、自分の家にも「じゅずの木」が生えてくるであろうことを考え、思い描いていた。MK児は神殿前に座るとドキッとなり、そのときの自分の緊張は、宮司への挨拶もできないくらいだったと表現している。またYE児はもくげんじゅ(じゅずの木)が今まで見た木の中で一番大きかったと書いているが、実際には園のグラウンドにもそれ以上の大きな桜の木があり、他でも多く目にしているにもかかわらずこのような感想が出たということに、いかに今回のじゅずの木を強く意識していたかが表れている。園児自らがこのように記したことから、本物に触れることで、緊張を交えた心踊るわくわくとした気持ちを感じ、お話の中の事物への印象が深く心に残った様子

が窺える。絵日記にしたことにより、民話の具体的なイメージを持ち続けて、その後の活動を続けることが可能となった。

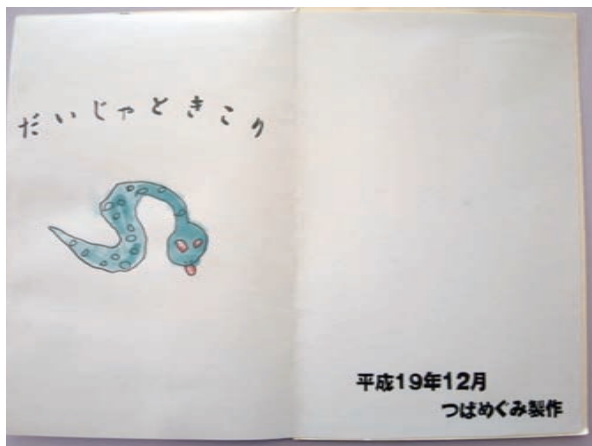
これまで聞いてきた民話の舞台を実際に見て、木や石にも触れたことが民話への深まりに繋がったようであり、家庭からも再度これらの場所を訪れ、園児自らが保護者に説明したとの報告もあった。園児を通して、各家庭にも地域に伝わる民話を身近に感じる機会を提供でき始めたようである。また今回の園外での活動は、園児の中に普段の園外保育(散歩)とは全く別の視点が生じ、皆が民話という共通の土台に立って、疑問や発見、様々な思いを言い合い、感じ、考える場にもなった。

4. 園児の語りによる伝承

次に園児による語りの活動に入ったが、無理のない取り組みを考慮し、4、5歳児は分担して覚える語り分けをした。すぐに話せるようにはなかったが、語り分けの部分で話の筋が途切れて人に伝わるには至らなかった。そこで自分以外の箇所への意識を促したところ、友だちの語り口を真似ながら声に出すということを楽しむようになり、一週間もするとほぼ覚えてしまい、話の途中で詰まることがあれば、その箇所を担当していた園児が口切りをし、再び繋がっていくという楽しい語りになっていった。皆で声を合わせて話すことを益々喜び、何度も行いうち、自然な感情移入が伴う伝わる語りへととなり、中でも4歳児では担任や友だちの語り口が、そのまま仲間にも移るといった口承ならではの様子が顕著に表れた。3歳児に関しては、担任保育士の語りに園児と一緒にしていくという形をとった。

11月の保護者参観週間で2日間、民話を語る機会を設けたところ、これまでの取り組みの過程において大きな関心を誘っていたこともあり、多数の保護者参加があった。以下にその時の保護者からの感想の一部を紹介する。

- ・素朴で穏やかな気持ちになれました。情感というのはこういうことで養われていくのですね。(3歳児母)
- ・大きな声＝叫ぶということではなく、早く話すわけでもなく、話しかけるようであったことに感心してしまいました。(3歳児母)
- ・上手くてびっくりしました。耳で聞いて覚えたからか“読む”ではなく“語る”という感じで聞き入ってしまいました。(4歳児母)
- ・道明寺の地藏尊のとき、じゅず回しというのをしていましたが、天満宮のじゅずの木からきているのかなと思いました。(4歳児母)
- ・初めて地域の民話を聞き、この歳になって良い勉強をさせていただいた。癒されました。(5歳児祖母)



見開き



①御陵の松の木を切ろうとした木こりが大蛇の声に脅されて重い荷物を運ぶ約束をする



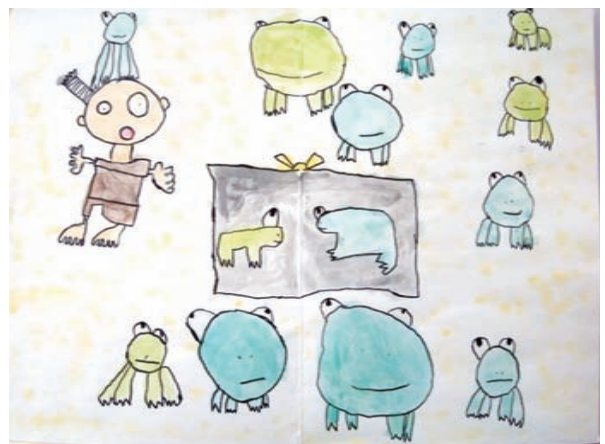
②木こりは毎日、きれいな若者の姿をした大蛇から荷物を受け取る



③木こりは荷物を池で待つ美しい姫に届ける



④ある日、木こりは約束を破って箱を開けてしまう



⑤箱の中から蛙がびょんびょん飛び出す

写真7)園児が描いた絵本『大蛇と木こり』

園児の語りは、上記のように、幼児期の聴き取り能力や語る力、保護者自身も確かでない地域に関することを子どもが語ることへの驚きなど、大きな反響を呼んだ。また地域のお話サークルの方々を招いて、その前でも語ってみたが、「3歳児の語りに涙が出た。柔らかい頭に素直に入っていくのでしょうね」「胸の中に話が残る、消えていくことがないと思う」など、話の筋がよく伝わるという評価を頂き、地域へ向けた園児による民話の活動の可能性が大いに感じられた。

5. 園児による民話の絵本作り

この後、これらの民話が普段の生活や遊びの中に入っていくことをねらいとして、各クラスで民話の絵本作りを行った。以下にその一例として4歳児の絵本作りの過程を記し、作品について考察を加える。

4歳児の作品「大蛇と木こり」

画材：4つ切り白画用紙

サインペン（黒・セピア）

水彩粉絵の具

製作にあたっては、担任保育士が登場人物や背景のイメージを園児たちに共有させながら、各場面ともに複数の園児で描き分ける方法をとった。園児が描いた枚数は、写真7)のように、表紙を含めて計6枚となった。

園児が描いた①のシーンには中央に允恭天皇陵(写真6)で見たうっそうとした木立と大蛇が大きく描かれている。見学時に見た大きな木立の中に大蛇が住んでいるという思いがずっと心の中に抱かれ続け、このような迫力ある絵を描かせたものと思われる。絵を描くにあたっては、木立、木こり、大蛇、松の木などを園児が分担して描いた。各ページに描かれている主人公の木こりは各々、異なる園児の手によって描かれているが、これは数名が描いたものの中から、いいと思う絵を自分たちで選び抜き、イメージを繋げたものである。異なる園児が描きながら、絵本を通して木こり像が一貫していることは、園児同士の間に、十分にイメージが共有され、皆が話の情景をよく思い描いていたことの証左と言える。

出来上がった絵本は、各クラスで読むことと、自宅への貸し出しを目的として数冊ずつ複写した。その結果、写真8)のように、友達同士で、言葉のつけられていない絵本を見ながら語り合う姿が見られるようになった。

また、貸し出し用の絵本には、感想を記すカードも付けたが、絵本返却時に提出されたカードには、「絵を見て話を進めており、しっかりと頭に入っている感じだった」「私が話すと自分は絵本を順にめくり見せてくれた」などの保護者からの感想が見られ、家庭でも子どもの手作りの民話の絵本を楽しんでいる様子が窺



写真8)園児同士の絵本の語り合い

われた。

活動のまとめとしては劇にして演じるという案も考えられたが、こうして絵本という形をとって、園児自身が積極的に関与できる方法、いくなれば「園児のサイズ」で活動をまとめられたことに、民話を園児により近づけるという意味で成果があったと考えられる。

以上、述べてきたように、地域の民話を題材として、それをまず保育者が園児に読み聞かせるという活動から、民話ゆかりの地域に出かける・自分たちで語る・人に聞かせる・絵本を作るという長期間にわたる実践にまで発展できたことは、さまざまな領域の活動をひとつのテーマのもとに総合させる保育の可能性と、子どもが持つ力を園内外に示すことにつながったのではないかと考える。

6. 考察

今回の取り組みで園児は地域の民話を通して、自然や実物に触れ、体験をもって驚き感動する心を感じた。そしてそれらを糧に仲間と共に表現する面白さを味わうことになった。

ところで、平成20年3月に改訂された保育所保育指針には、新たに保護者を含めた地域支援の必要性が明記されているが、この観点からも、今回の活動は、地域支援に貢献できる可能性があるものと考えられる。活動の中で、保育園児が地域の民話に関する事柄を訪ね歩いたり、話をしたりする姿を目にした地域住民は、自分たちの地域を知ろうとする気持ちをあらたにしたのではないかと推察される。こうした取組みが、長い目で見た時に、地域力の一つに繋がっていくのであろうと期待される。

お話を覚えるとき、大人は懸命に本などから字を追って覚えようとするが、子どもは耳で聞いて容易に覚えてしまう。今回の園児による語りは、よく伝わることに驚かされたという評価を得たことから、子どもが語って表現する楽しさを感じるようになったとき、まさに口承による伝承者となったのではないかと考え

れる。また、言葉や話をすぐさま吸収し、ためらいなくなりきって表現できる幼児期に、民話を通して地域に触れていくことで、保護者にも地域への関心と伝承の必要性を実感させたと言える。

今後は園外にも園児による民話の語りの活動を広げていき、民話の宝庫であるこの地域に位置する本園としての特色ある活動を発展させていきたいと考える。

付記

本稿は、2008年5月17日の日本保育学会第61回大会における口頭発表、「保育園児による地域の民話の伝承 ―地域の保育園としての文化伝承の可能性とその意義を探る―」(ひかり保育園・岡田桂子、皇學館大学・檜垣博子との共同研究)を発展させたものである。共同研究に参加して下さった岡田先生、檜垣先生、及び一緒にこの活動に取り組んで下さった担任保育士にお礼申し上げます。

注

- 1) 5世紀中期～後期のもと言われ、全長227m、3段造りの前方後円墳で50～70mの濠で囲まれている。